

■ 色麻町立色麻学園視察アンケート調査の集計結果

[色麻町立色麻学園を視察して参考になった点]

学校形態について参考になった点

- 小中一貫した9か年の学びを通して子供を育てることができる。
- 6-3制の区切りにとらわれず、発達段階に応じた指導で、中学校進学時の不登校やいじめ中1ギャップを回避することができる。
- 教員の専門性を生かし、小・中学校教員が相互に乗り入れ授業が可能である。
- 小中一貫校から義務教育学校へ移行した経験から、より具体的なメリット、デメリットを把握できた。
- 特にデメリット(課題)で想定される中1ギャップへの対応として、中期(5学年～7学年)にしている点が参考になった。
- 小学校卒業の達成感の喪失や、リーダーシップ・自主性を養う機会のロスについての懸念は学校教育の中で大切な視点として、今後機会づくりを考えていく必要性を感じた。
- 「4-3-2」の形態は全国的に見直しをする学校もあり、中学年のメリットとデメリットの検討をしっかりと行うことが必要。
- 教職員の考えをまとめ、一人一人の資質の向上が必要である。小中一貫教育や義務教育学校に対する考え方を批判的な視点から考えるようでは、新しい学校に求める教員像ではない。職員室の雰囲気から色麻町の学校に勤めるという気概と良さを感じた。
- 今回の視察は小中一貫校と義務教育学校の差異をメリットとデメリットの側面から明らかにすることだったと思う。結論から言えば、教職員定数の違い(副校長の配置)と兼務発令手続きの要、不要の違い程度しかないということだったと思う。説明を聞いていて、教育上できることとできないことという点については、両者の間に大きな違いは無かったと感じた。授業乗り入れや学年間交流、職員室の一体感や組織を混成させるやり方など、色麻学園ならではの成果を上げていると思うが、それは小中一貫校時代もやってきたことで、義務教育学校であるから、というのではなさそうだ。例えば、4-3-2制をとったのは平成19年であり、そこから現在の教育課程が形成されたことを考えれば、学校要覧にあるような特色ある期部ごとのカリキュラムは義務教育学校でなくとも可能ということになる。なお、色麻の4-3-2制については前期後期という枠組みをほぼそのまま残したまま進めているため、特に中期の子供たち、7年生あたりは中期部の指導と後期(中学的要素)間に挟まれて指導方針が曖昧になるのではないかと感じた。
- 小中一貫して9年間とすることで、義務教育期間の教育の方向性が明確となり、教育ができているところが参考となった(女川小・中学校でも同様)
- 法令上、義務教育学校においても前期課程6年、後期課程3年にしなければならないが、教育内容・教育活動の部分で4-3-2制を取っている点が参考になった。ただ、中1ギャップの緩和等については、もう少し実証データが必要であると感じた。後期課程の教員が5・

6年生の教科担任を務めることについても参考にはなったが、教員の負担が増加しないかという点が気になった（現在は学級数が少ないのでやっているのだと思うが・・・）。

- 義務教育学校だと中学校の先生が小学校に担当教科を教えることができる。
- 小中一貫校から義務教育学校へ移行した経緯を聞かせていただき2つの違いがよくわかりました。特に校長先生が1名で副校長先生が1名いること、教頭先生が2名、さらに、職員の加配があることが良いと思いました。
- 女川との違い、全ての行事が一緒。中学年部による相互交流、小・中職員のコミュニケーションの細やかさ、これぞ小中連携と感じました。
- 小中一貫校から義務教育学校に移行したということで、移行に至った経緯やそれぞれを比較した時の違いがとても分かりやすかった。
- 4-3-2制の9年間の教育課程で長期的かつ細かな指導ができること。
- 義務教育学校なので、乗り入れ授業が制限なしで可能。
- 校長と教頭の間副校長がいる。
- 校長1名、副校長1名
- 9年間の教育目標の設定
- 9年間の系統性・体系性に配慮がなされている教育課題の編成。前期（小1～4）中期（小5～中1）後期（中2～3）
- 小・中教員の情報交換が容易
- 小・中学校の教員による相互乗り入れ授業が可能
- 小中一貫校から義務教育学校への移行ということで、両方の話を聞くことができ、メリット・デメリットなど参考になりました。義務教育学校に移行し、乗り入れ授業では専門的な指導を受けることができ、また、5・6年生（中期）から部活に参加することで後期の学生との交流も増え、お手本となっていく気持ちの成長ができると感じました。
- 乗り入れ授業を取り入れられており、児童・教諭共に新しい学びや発見が得られる。兼務申請なしでできる。
- 4年生と9年生、5年生と7年生等、他学年との交流をしている。中1ギャップが減る。
- 学習発表会と文化祭を同日に開催したり、運動会を前後期合同で行ったりするなど保護者の負担が少なくなる。職員室が1つで小・中の先生方が気軽に情報共有したり意見交流したりできる。
- 前期（小1～4）《基礎》学習や生活の規則基本、中期（小5～中1）《活用》個に応じた学力向上、後期（中2～3）《発展》個性と能力の伸長 指導区分がしっかりしている。理科の乗り入れ授業など。
- 小中一貫校から義務教育学校に移行した点

学校施設について参考になった点

- 学校行事や部活動、生徒会児童会、体育館や校庭やプール、特別教室の使用など、教職員間の調整と共通理解が常に必要であること。
- 地域交流を図るための部屋があり、職員室が小・中一緒であること(義務学校では当たり前だが)。
- 各教室に「非常ボタン」が付いているインターフォンが、全教室に配備されていること。
- グラウンドや音楽室、理科室など、今後の町内児童数のバランスをみて、必要性に応じて検討すべきであると感じた。ただ9学年もあれば1つずつでは足りないかと想像される。
- 既存の中学校に小学校を新設する形はよいと考える。自衛隊関係の助成は大きい。また、町の運動施設等が隣接していることも非常に良かった。町の学校を中心とした町民の動きが見えていた。
- 職員室は女川同様一体感があってよい。是非参考にしたい。
- 色麻学園前期課程の教頭先生が話されていましたが、学校に隣接する町のグラウンドや体育館を借りながら授業を行っているということでしたが、学校のものではないため、施設借用の手続きが面倒であると話がありました。学校の行事やカリキュラム、急な予定など、学校以外の施設の調整も必要となると教職員の負担も大きくなることが予想されます。グラウンドや体育館については小学校用中学校用の2つ必要ではないかと考えます。プールについては水道代なども考慮すると、小学校用と中学校用とするのではなく、女川小・中学校のように一つのプールで深さを変えることで対応が可能かと考えます。
- 図書室が町民用図書館と併用というのも良かったです。
- 既設の中学校校舎に隣接する形で小学校の校舎が新設された点が参考になった。小学校・中学校をフロアで分けるのではなく、建物で分けることはそれぞれの学校文化を生かしながら小・中連携を進める上でポイントだと思った。また、町営グラウンドが隣接していたり、町民も使える図書室(館)が校舎内にあったりしている点は大変良いことだと感じた。学校と町の文化・体育施設が近いということも新しい学校づくりを進める上でポイントであると考ええる。
- 図書室を町民の方も利用できる点。
- 保健室を前期と後期で分けていたところ。
- 既存の校舎に増築して建てているため、財政的には優しいと思った。
- 地域の一般の方も利用できる図書館は良いと思った。
- ALTが常駐していて小学生も利用できるのが、すごく良いと思った。
- 芝の管理はととても大変そうだった。
- 乗り入れ授業がすごく良いと思った。(教科もですが、部活動も)
- 施設が大きくなりますが、きちんと整備されているところ。維持管理は多大な配慮があるも

のと思いました。

- 校庭が芝生で感動したが、管理が大変で手間も費用もかかる。スプリンクラーが設置されている。
- 図書室が一般にも開放されている。
- 新しい体育館に冷房がないため、夏場はとても暑くなる。
- 後期課程使用のグラウンドと体育館は、町所有のため使用許可を申請しなければならない。
- 新と旧の校舎間の移動は1階のみ
- 学校周辺に教育施設が集まっている。
- 相談ルームの充実
- 期部別で対応できる保健室がある。
- 一般の方も利用できる図書室がある。
- 学校に行けない生徒が通う教室がある。
- トイレがすべて洋式、校庭が芝
- 元の中学校も使用することで、特別教室を分けて使用でき授業の調整がしやすいと思いました。相談室も用途別に多くあり、保健室も2つあり、年代が広いための配慮もしっかりされていました。体育館や特別教室へのエアコン設置は必須と感じました。
- 特別教室を共有しているところがあり無駄がない。楽器が多かった。水道の蛇口が多い方が便利。色麻学園は少なくて混雑するそうです。前期の廊下が広く、長椅子が置いてあった。保健室が前後期に各1つあり養護教諭もそれぞれ常駐しているのが安心できる。全面芝は魅力的だが、管理が大変だというのが分かった。(除草や水やり等) PTA が会議や打合せに利用できる部屋があって便利だと思った。図書室が一般の方も利用できる地域の方と自然に交流できる。教室に入れない生徒が過ごす部屋があって安心できると思った。英語の先生が常駐する部屋があり、入室すると日本語禁止と聞いておもしろそうだと感じた。中庭に小さなステージがあった。
- 小・中学校の昇降口が同じ
- 校庭の芝生（日々の手入れは大変だと思うが）
- 町民も利用できる図書館
- 義務教育学校にするのであれば校舎は一体型にすべきだと感じました。(児童生徒、教職員の移動を考えて)
- 校長室、副校長室が職員室とは別に離れていた点は学校運営上、あまり良くないことだと感じました。

学校の特色について参考になった点

- 山元町と同様に、地元の伝統文化、物産、人とのつながり等を大切にしていること。

- 4－3－2制について、目的をもって設定している点
- コミュニティ・スクール、伝統文化の継承
- 5・6年生から部活動へ参加
- 子供たちの生き生きとした表情がよかった。日々の学校生活が楽しいのであると考える。
- 「わが子、わが孫を通わせたいと思える学校」、卒業生が「心から誇りにできる母校」というのがとても良いと感じました。山元町内の学校ではなく仙台市内の私立学校を考えるご家庭もあります。遠くに通わせてでも質の高い学校へという現状があります。町民が地元の学校に通わせたいと思える学校づくり、再編を望みます。
- 色麻町、色麻町教育委員会のバックアップが強力であると感じた。「色麻学」については学校単独の取組みではなく、色麻町教育委員会生涯学習課が所管する活動であるという。学校の特色には、子供への期待に加えて、地域の実態や願い、街づくりの方向性などが反映されることが望ましいと考える。学校経営の主体性を尊重しつつも町教育委員会の従来にも増した適切かつ積極的なかわりが必要だと思った。
- 運動会を1年生から9年生まで一緒に行っている。
- 高校や他校との交流が盛んなのが良いと思った。
- ノーチャイムで過ごしているのもすごいと思った。
- 合言葉「凡事徹底」「頑張ることはカッコいい」私も真似したいと思った。
- 5・6年、中1年の中学年部の発想はとても良い。
- 他校との交流活動（女川小・中学校、加美農業高校）
- 町の行事に参加して地域貢献活動を行っている。
- 8年生で立志式
- 運動会や文化祭を合同開催
- 給食センターと連携して給食ができるまでの映像を児童生徒に見せていること。
- 他学年との交流学活
- ノーチャイムで過ごす学校生活から時計を見て行動し、時間を守る習慣を身に付ける。
- 5・6年生で計4教科について教科担任制を実施
- 中期部、後期部での活動を多く実施
- 総合的な学習の時間で地域を学び、志教育を充実させる。
- 交流学活（4・9年生、5・7年生、6・8年生の合同学活）
- 中期からの教科担任制を充実させることで専門的な指導を受け入れる点。
- 全学年45分ノーチャイムでの授業で、後期は7時間目があるのは高校へ向けての準備になりいいと思います。
- 地域のことを調べ、知ること、体験すること、新しく自分たちで作り出すなど幅広く志教育を充実させるべくカリキュラムを組んでいる点。

- 地域の特産や伝統を学び、後期では太鼓や神楽を受け継いでいる。
- 地域の幼稚園・高校・大学との連携をとっている。高校生が野菜販売に来る。
- 地域の方が利用できる学校の図書館がある。(自然に交流できる)
- 他校(女川)との交流をしている。
- 学校づくりに生徒会・児童会が担っているので全児童・生徒が参加している。
- 学習発表会、文化祭が一体化され学園祭となっていること
- 地域学(総合的な学習)の授業がとても良かったと思います。(女川や加美農との交流)
- 4-3-2制の導入(中1ギャップ等の解消)

上記以外の意見

- 学校は地域のものであると考えます。また、学校は単にあるものではなく、つくるものでもあります。今後も地域の思いを大切にしながら、震災による津波等を想定した安全な地域・場所を考慮しながらの再編協議と思っております。
- 色麻学園では元中学校の校舎を改装しての使用をしていました。話によると築年数では50年近くになるようですが、耐震工事等を実施しており、校舎を壊し、建て替えになると、耐震等が出ていた補助金の返金などが発生する等の理由から中学校校舎の改装となったようです。そう考えると、山元中学校の校舎は比較的新しいと思われます。費用面、学校の用地面も考慮すると、現中学校校舎を活用し、小・中学校の敷地を使用することで、グラウンドの確保もできるのではないかと思います。また、山元町内の子供たち全員の通学を考えると町の中央近くに学校を設置する必要があり、現在の山元中学校、山下小学校の敷地を活用し検討するのが良いのではないかと思います。
- 2回の学校視察を通じて、小中連携の魅力と重要性は再認識できた。しかし、義務教育学校の利点等については十分にはつかめなかった。義務教育学校の良さ、利点として語られていることについて、可能な限りデータ等(一例を挙げれば、文部科学省 国立教育政策研究所『中1ギャップ』の真実)での確認作業も必要であると思う。
- 次世代の非常に厳しい日本で生きていくためには、その頃には大人である今の子供たちを心配するだけでなく適応能力のある人間に育てる教育が必要であります。
- 事務手続きなしで乗り入れ授業が行えるのは素晴らしい。4教科のみでなくもっとしても良いのではないかと思います。
- 中学入学に伴う事務手続きが少ないのもすごく良い。
- 女川の小中一貫校を見学した時はきれいすぎて現実味が持てなかったが、色麻学園は、これなら山元町でも可能なのではと思った。
- 部活のない日の放課後に自分の卒業した小学校に遊びに行く中学生の姿を時々見かけます。たまに、うちの娘も小学校へ遊びにいったら、小学生と一緒に遊んで元気ももらって帰ってき

ます。中学生は単純に遊びに行っているだけかもしれませんが、小学生にとっては卒業した先輩が遊びに来てくれたととても喜んでいきます。縦割りで一緒に活動した先輩が中学生になっても遊んでくれる。そういう先輩たちの姿が自然と後輩たちにとって憧れの存在になり、中学生にとっても後輩たちに対する思いやりが生まれるのかなと思っています。それが、自然と受け継がれているので、山元町の伝統のようなものかなと思っています。再編して1つの学校になるとそういう場所が減ってしまうので、学校生活の中でそういうものを育む機会がたくさんあるようなそういった学校形態・学校施設になってほしいと願っています。

- セキュリティの問題～安心できる場所として学校はあってほしいと思います。
- プール～やはり人目が遮られる場所で、暑さ対策も必要な時代のため屋根付きまたは屋内が望ましい。
- 芝～管理維持を考えると人工芝で、トラック競技用とで校庭を分けて使用することで部活も活動しやすくなるのでは。
- 小中一貫校や義務教育学校になった場合、中1ギャップのリスクは減るが、小→中への気持ちの切り替えが難しいのかなと思った。また、9年間同じ人間関係が続くので、いじめがあった場合の対策を十分に考える必要があると思う。
- 現在4つの小学校があり、それぞれの学校での伝統として守ってきたものもあるだろうと思うので、一つの学校となったときにどのように取り入れていくのか検討が必要だと思う。
- 体育館、各教室に冷暖房完備にしてあると良い。
- 色麻学園の中学校側のグラウンドは、町の施設で申請等が非常に面倒とのことだったので学校管理下の方が良いと思う。
- 4-3-2製の期部制にすることで、それぞれの期部で特徴ある行事や活動があると思う。
- その行事も前期課程と後期課程と分けるのではなく、全校の児童生徒参加型で実施していく方が義務教育学校らしいと思います。(例：中総体の壮行式を1年生から9年生全員で等)
- 校歌は1つにすべきだと思います。

[現時点での考え]

《学校形態について》							
①連携	1名	②一貫	3名	③一貫か義務	2名	④義務	10名

①小中連携と考えた理由

- 義務教育学校における教職員は、6歳から15歳までの児童生徒一人一人ときめ細かく向き合うことが常に求められる。現在の山元町の小・中児童生徒の総計人数では、かなり難しいと思われる。
- 色麻学園では、4-3-2制として発達段階に応じた児童生徒の指導に当たっているが、小・中の重なりである「3」のところに、義務教育学校(小・中教員)の難しさや課題がある

ように

思われる。しかしながら、これらは教職員の取組・心掛け次第であり、上記等の課題に十分な改善が図られ、地域の理解を得られ、小・中児童生徒の総計人数が色麻学園程度の規模であれば、義務教育学校が相応しいと考える。

②小中一貫校と考えた理由

- 小中連携の教育を推進することは必要であると強く感じた。ただ、義務教育学校にする利点が具体的につかめない。中1ギャップの解消、中学校教員の乗り入れ授業などの説明はあったが、逆に小学6年生の最高学年としての主体性や自覚をどう育むか、中学校教員の負担が増すのではないかとといった不安が大きい。さらに小学校、中学校の学校文化の違いは大きいことから、早急に義務教育学校という形態に進むのではなく、小中一貫校として連携した教育活動を数年積み重ねて下地をつくり、女川町の考え方のように機が熟してから再度義務教育学校への移行を考えるという方向性が現実的であると思う。
- 本心から言えば③であり、色麻学園のようなシステムが山元町、そして子供たちに会うと思います。しかし、中学校の近隣の現状から、このスタイルを仕上げていくためにコミュニケーションがしっかりとれるスタッフを集めるのは難しそうです。
- 長いスパンで見たら義務教育学校も良いと思うが、現時点では4つの小学校を1つにするには、小中一貫校が良いと思う。

③小中一貫校あるいは義務教育学校と考えた理由

- 色麻町はR4・5年度の出生数が40人を下回ったと聞いた。本町もR5年度の出生数が、40人を下回っており、より魅力ある学校づくりを進めるのであれば、既存の形からの脱却は必要であると感じる。また、小学校を一つにするだけでなく、学校を一つにするという考え方から、より地域の理解が得られると考える。
- ②は6-3制で気持ちの切り替えができる。今までの制度と同じだと抵抗感を感じずに移行しやすいのではないかと。③は校長が1名なので、教育委員会と学校の連携がスムーズでことを進めやすい。②③小学校のうちから中学校の先生の授業を受けられる。小学生は身近に中学生がいるので憧れや最終目標をイメージしやすい。中1ギャップのリスクが減る。先生方が長く子供たちの成長を見守ることができ気軽に情報共有や意見交換ができる。

④義務教育学校と考えた理由

- 今回の視察では、「副校長の配置」が義務教育学校のメリットと大きいと感じた。単に人員が増えるだけでなく、校長→副校長→教頭という指揮系統を明確にし、小・中という枠を根本的に無くして学校を教員組織、児童生徒の意識ともに一体化させることに役立つ体制になると思われる。小中一貫校の二人校長制はこのような点からスムーズな学校運営を行うのに足かせになることも考えられる。小中一貫校でも女川小・中のように一人配置で一体化済ませればよいかといえば、色麻のように児童生徒数が400を超え、職員数も50近い人員を

束ねるのには無理がある（校務の分担が必須）。校長のリーダーシップを中心に、教師が一体感と共通した使命感を持って学校教育に参画できる組織を固める。これを実現するには小中一貫校でも可能であるが、どちらかと言えば義務教育学校のほうがやりやすいのかも知れない。また、小・中の授業乗り入れはどちらの形態でも積極的に推進しなければならないが兼務発令を申請する手間と時間を考えれば、義務教育学校のほうがストレスがない。

- 教育面において、科目の専門的な先生より教育内容を受けられる。
- 教育の9年間の系統制や連続性があることで、教員・児童同士の学校生活での関わり方が変わり、昨今の不登校問題の解消につながるきっかけへの期待。
- 乗り入れ授業が制約なしで行える利点。
- 組織として1つなので、学校・家庭・地域との連携が取りやすいと思います。また、職員の先生方が情報を共有しやすく、学生の成長や発達の状況などを把握してもらえたら、家庭からも相談しやすく安心だと考えます。将来的に子供たちの人数が減ることを考えると、1～9年間を通してのカリキュラムと縦割り活動での関わりが子供たちを成長させてくれると思いました。
- 少子化が進む山元町では、子供の数が非常に少ないことから、町内の子供たちが集まり、集団生活での学びが実現すること、少数だからこそ可能な小中一貫した学びができると良いと考えていました。そのため、②小中一貫校 または ③義務教育学校 いずれかの形態を望みます。②小中一貫校 ③義務教育学校どちらが良いかについては、正直、保護者目線からではよくわかりませんでした。ただ、色麻学園教職員の話聞き、教職員にとっては手続きや制度などの制約を考えると、③義務教育学校のほうが運営しやすいとの話がありました。教職員が運用しやすい形態にすることで、教育の質を向上できると期待し、③義務教育学校の形態を選択しました。
- 乗り入れ授業に係る事務手続きがないこと。この取組を行うことで、中1ギャップの解消が期待できること。「義務教育の9年間を見越した教育」が今後も進められると考えられ、であれば、義務教育学校の形態が進めやすいと思ったからです。
- 金銭面や教員のやりやすさを考えると義務教育学校が一番山元町にはあっていると思った。
- 実際に小中一貫校を9年行ってみて、その後、義務教育学校の方が、さらに良いと移行した経緯を聞くと義務教育学校の方に魅力を感じます。
- 9年間という教育課程の方が、一貫した教育を行うことができる。
- 乗り入れ授業は②でも行えるが、③の方がやりやすい。
- 町に小・中1校ずつになるのであれば②か③、仮に②にしてもいづれ③になることが想像できる。
- 中学生と小学生と一緒に過ごすことで、後輩への思いやりや先輩への憧れというものが育まれる。

- 小・中ギャップの緩和・解消
- 9年間の系統性や連続性に配慮した教育カリキュラムの作成や指導を行うことが可能
- 前期課程（小学校）後期課程（中学校）の教員の相互乗り入れ授業が制限なしで行うことができる。
- 1～9年までのダイナミックな異学年交流が行える。
- 5・6年からの「部活動」参加可能（ただし中学校体育大会には出場できない）
- 義務教育学校だと9年間のスパンの中で全教職員が児童生徒と関わることができ、一貫した教育ができる点が非常に良いと思われる。
- 小中一貫校の形態だと兼務発令によって乗り入れ等になってしまうが、義務教育学校だと兼務発令もなく授業の乗り入れができる点が良いと思われる。

⑤その他

- 教育の質の向上がえられれば、形態には拘らない。

《学校施設について》

①一体型	9名	②一体型か併設型	2名	③併設型	5名	④分離型	1名
------	----	----------	----	------	----	------	----

①施設一体型と考えた理由

- 小中一貫校や義務教育学校にするなら、施設一体型または併設型にしないと意味がないように感じます。
- 2校を視察して、最初にいいなと感じたところは、職員室が1つというところ。一緒にいることで情報交換や意見交換がしやすくなっている。兄弟姉妹が同じ学校に通えること。
- 同じ敷地・校舎内で小学校1年生から中学3年生まで9年間一緒に学校生活を送り、一貫した教育活動が展開できるから。
- 兄弟姉妹が同じ学校に通わせられる安心感があり、緊急時の対応が円滑に済むから。
- 小中一貫の形態をとるなら、施設一体型が良いと思います。職員の連携を図るには、同じ建物にするほうが良いと思いますし、生徒も下級生から上級生まで互いの様子を見ながら成長できることは良いと思います。
- ①か②かは、財源と既存施設を生かせるか否かで決まる。これは理想論だけでは現実化できないので、①としておきながらも②で実現してもよいと思う。色麻学園は旧校舎の改造を工夫して費用を節減した。大いに参考になると思う。
- 義務教育学校であれば一体型が望ましいと考えます。（一貫校であれば併設あるいは隣接でもいいかと思えます）
- 学校形態に拘わらず、これからの学校は改革が必要ですが、教師・生徒・地域が互いに「見る、見られる、関係する」ことにより、それ自体が各自の教育に結びつくと考えます。
- 以前、現中学校施設の状態について質問させていただいた際に、耐震などもしており、まだ十分に使用可能のようでしたので、色麻学園のような形態が良いのかなと思いました。消防

法が気になりますが、一体型でも校舎を分ける、フロアを分けることで、中学生として進級気分が味わえると思います。

○義務教育学校としてならば、一体型が望ましいと思いました。

○授業や行事、乗り入れ授業、その他諸活動を実施していくのであれば、適していると感じました。

②施設一体型あるいは併設型と考えた理由

○Q2の②か③であれば、Q5は①か②が適当である。

○身近に中学生（後期）がいることで、中学生への期待や憧れを持ちやすい。下級生への思いやりを持てる。

○他学年との交流をしやすい。乗り入れ授業での先生の移動、特別教室への移動が楽。

○先生や子供たちが一つの集団として団結や絆が生まれるのではないかと思う。

③施設併設型あるいは隣接型と考えた理由

○現実的に考えると、色麻学園の実例で工費と補助金の兼ね合いが判断軸の大きな1つだと伺った。

○個人的な意見としては、町内の山元中学校の建物を活用した形で併設・隣接型が妥当と考える。

○町内各地からの登校距離についても、現山元中学校にいずれ通うことを想定すると許容されるのではないかと思う。

○ただし、低学年児童もいる中で、放課後クラブや児童館の仕組みを充実させ、児童も保護者も不安なく安全安心に過ごせることの準備が必要。

○施設一体型にしてしまうと、学校文化の違いが子供たちの学校生活に与える影響はかなり大きいと考える。1単位時間の違い、部活動、学校行事等々、施設一体型にしてしまうと子供たちのそれぞれの学校文化に根差した教育活動の展開に支障が出るように思う。同一敷地内に小・中それぞれの校舎があり、小中一貫した教育、小中連携した教育が多様に展開される方向で考えたい。

○今から新しく再建より、金銭面、これからの山元町は子供の人数が減少傾向になるので、今ある学校を利用して再建が望ましいと思ったため。

○小・中と併せてゼロベースで設置することは、条件・財政的に現実的ではないと思います。色麻と同様、中学校を基盤として、山下小学校との組み合わせ、合同職員室設置、教室等の配置の工夫が良かったと思います。

○山元中は部活動も力を入れているので、体育館や音楽室は今のままで使用できたら良い。

○大、小の体育館、音楽、美術、図工室が必要なのと教室やクラスによって授業の時に遠慮なく使用できる方が良い。

④施設分離型と考えた理由

○小中連携校であるのならば、施設分離型(小・中がそれぞれ別の学校であるという前提)がふさわしい。義務教育学校であるのならば、児童生徒・教職員の動線から施設一体型の方が望ましいと考える。しかしながら、学校用地・費用等で困難であるならば、施設併設型 or 隣接型になるものとする。

《学校の特色について》

再編小学校に取り入れたい特色

- 各校で取り組んでいるお神楽や太鼓、各プロジェクト活動、大学との連携実践など。
- コミュニティ・スクール、伝統文化の継承 → 学校内外で披露できる機会があるとよい。
- 5・6年生から部活動へ参加 → 文武両道の精神、部活動を通じた人間関係構築を育む機会
ジュニアの育成で中学生大会に向けた目標達成へのチャレンジ精神を育む。
- 山元町の文化を継承し、歴史を学べる学校にしてほしいと思います。地域の産業にも目を向ける教育を行い、山元町を誇りに思い、大人になり山元町で仕事をする、そんな意識を持てるような子供たちを育てられるようにしてほしい。
- 小・中連携を進める要は、「女川学」や「色麻学」などの例にみられるような9年間を見通した教育内容をもつ活動であると考えて。「総合的な学習の時間」を利用し、山元町の使命に関する内容(震災・防災関係)、山元町の特色や人々の営みに関する内容(ローカルな内容)、日本や世界とつながり地域課題を追求する内容(グローバルな内容)を柱とする言わば「山元学」を考えたい。当然、現在取り組んでいる「みのりプラン」も特色として打ち出したい。
- 地域の関わりや連携など。→山元町はいちごやリンゴ、ホッキ貝など、農業や漁業が盛んなので子供たちにもそういった体験などができる機会があると良いと思った。
- 30人学級の実現あるいは2学級3担任の体制
- 自由で平等な競争がある。
- 個性を認め伸ばす。
- 他学校との交流ととても良いので取り入れられればと思う。
- 小・中合同職員室、中学年部(小5～中1)、小・中合同の行事
- 運動会や文化祭の合同開催、山元の歴史探訪、山元の文化伝統の継承、他学年との交流学活
縦割り活動
- 地域や他校との交流、地域の方が学校に興味関心を持ってくれるよう、地域と関わる行事がいくつかあってほしい。
- 山元町の各地区に伝わる神楽や踊りなどの伝統芸能を継続して授業に取り入れ受け継いでほ

しい。

- 地域とのつながり～指導者に地域住民を招き協働的な関わりを持つ（おけさ、神楽、復興太鼓、鼓笛隊等）。
- 特産を生かした体験カリキュラム～地元を知り愛着を持ってもらう（漁業、農業（さつまいも、リンゴ、苺、ブドウ））
- ICTカリキュラムの充実～自分たちで学校のことや町のこと、好きなことをまとめたり、発信していったりするための基礎をしっかりと学ぶ。
- 震災で大きな被害を受けた町なので防災に力を入れる学校
- 地域について学び、伝統や特産などを受け継いでほしい。
- 1つの教科でも良いので、何かに特に力を入れる学校、放課後のクラブ活動でも良いのかも…。
- 山二太鼓、町の郷土料理（はらこめし）、朝の挨拶、リサイクル運動（校舎の外に専用のプレハブがあるので、時間を気にせず段ボール類などいつでも持っていけること）
- 山元町ならではのものをメインにカリキュラムに取り入れ実践していけたらと思います。
（防災教育、山元学、行事、部活動 等）